

登場人物

姫娥 暮天（こうが ぼてん） 幻山に住む人魚。豊かな胸が官能的。妖精。

ミハイル・アリオーナフ アリオーナ星の第一王子。後に王様となる。

フェリクス・アリオーナフ アリオーナ星の第二王子。ミハイルと母親が違うが、同じ年齢。

ユーリー・アリオーナフ アリオーナ星の第三王子。二人の兄に逆らえないでいる。

リゲル・アリオーナフ 姫娥の息子。後にアリオーナ星の王となる。妖精。

レオニード・アリオーナフ リゲルの息子。姫娥に育てられ、後に護衛係となる。妖精。

ブライト・ミナレット 姫娥の元恋人で、六連の父親。妖精。

六連 昴（むつら ぼう） 姫娥の息子。彼女と近親相姦の関係になる。妖精。

ディオオーネ・ネメラローダ 姫娥と六連の間にできた娘。妖精。

リン・プラネード カロンの母親。旧人類。

カロン・プラネード 姫娥が守護している人間。旧人類。

パチエーリヤ・スラーヴァ プラネシアン教の信者。旧人類。

デスコル 六連が守護している人間。新人類。

未来人（みくひと） カロンの子供。新人類。

有栖川 ミルナ（ありすがわ みるな） デスコルの妻だった女。旧人類。

第一節 3人の王子様が

どの位昔のことかは定かではないが、三人の男が湖の周辺を歩いていた。彼らは三人とも身長が二メートル以上あり、褐色の肌をし、赤い髪に緑色の瞳をしていた。三人ともマントをつけており、仮面をつけていた。三人は兄弟で、上からミハイル、フェリクス、ユーリーという名前だった。フェリクスとユーリーは同じ母親から生まれたが、ミハイルだけは母親が違っていた。

「噂には聞いていたけど、ここまで変わってしまったとはね。本当にドミモレエか？」
「の、はずですけど…」

「昔の面影がまったくないぞ。」

「足元に気をつけろ、木の根っこに躓くぞ。」

「んな馬鹿な真似はしないって。」

「と言いつつ、フェリクスは躓きそうになる。」

「ほら、言わんこっちゃないっ！」

転びそうになった瞬間、何かかフェリクスの目に入ってきた。フェリクスは低木をかき分け、一人、その方向に歩き出した。

「おい、フェリクス！勝手な行動は許さんぞ！」

フェリクスを止めようとしたが、ユーリーもそっちへ行ってしまったので、ミハイルも後を追った。

湖に面した所に生えていた木の枝に、何かか引つかかっていた。

「着物？」

フェリクスは引つかかっていた着物を取り、広げた。淡いパステルカラーの緑とピンク色の雲のような模様が白い布地にぼんやりといくつもついていた。

「美しい生地ですね。」

「誰かが着ていたとか…」

フェリクスは着物を太陽に透かした。

「ちよつと借りるぞ。」

ミハイルはフェリクスから着物を奪うと、それを持って歩き始めた。

「その着物、元に戻さなくていいんですか？」

ユーリーはうろたえて言った。

「何故だ？」

「なぜって、この湖で泳いでいる人のものかもしれないじゃないですか。それに、女の人の着物じゃないんですか？それ。」

「ちようどいい。」

「え？」

「もしこの服の持ち主が現れたら、そいつにこの星のことを聞き出せる。」

「…そうですね。」

三人は再び歩き出した。

三人は湖の周辺をずっと歩いてきたが、人っ子一人見つからなかった。ユーリーは、時々湖を見、誰かが泳いでいないか、見ていたが、湖は穏やかで、何の音もしなかった。

「ここには人間がいらないようだな。」

三人は、この星の人間と接触するのが目的でこの星に降り立ったのに、誰とも会うことができなかった。三人があきらめ、湖の周辺を後にしようと思ったその時だった。

「誰だっ！」

低木がカサカサ音を立てたのに驚いて、三人は一斉に後ろを振り返った。

「出て来い！さもないと、打つぞ！」

ミハイルは空に向かって銃を一発撃った。すると、さっきまでさえずっていた鳥が一斉に飛び立った。

「そこにいるのは分かっているんだぞ！さっさと出て来い！」

ミハイルは、声を苛立てていたが、内心は、何が出てくるのか分からず、ドキドキしていた。三人は、息をのんだ。

ゆっくりと姿を現したのは、女だった。彼女は、鈍い黄色の髪をしており、青い目をしていて、彼女の白い肌は、周りの緑から浮き立っていた。彼女は、裸で、左手で胸を押さえ、右手で陰部を押さえていた。彼女の胸はかなり大きく、片手で胸を押さえるのは困難に思えた。

「おやおや、誰かと思ったらかわいらしいお嬢さんだ。」

フェリクスは彼女の顔ではなく、胸を見ていた。それは他の2人も同じだった。

「私の服を返して下さい！」

彼女の両目は潤んでおり、声は震えていた。明らかにこの見慣れぬ3人の仮面をつけた巨人を恐れているようだった。

「ではこれはおまえのか？」

ミハイルは先ほどフェリクスが見つけた着物を取り出し、広げた。

「そうです。どうか返して下さい！」

彼女が少し動いたので、ピンク色の乳首が指からはみ出てしまった。3人の男は、息をのんだ。

「その前に教えて欲しいことがある。我々の質問に答えると約束してくれたら、この着物はお前に返してやろう。」

「どのような質問ですか？」

「この星についての質問だ。」

「まあ、それなら私じゃなくてもいいでしょう。」

「もちろん、質問に完璧に答える必要はない。ただ、我々3人はこの星の住人ではないから

この星の住人であるお前に、道案内等もやってもらおうと思うのだが、いいか？」

「それはかまいません。しかしなぜ私なの？」

「分からないか？お前は我々が最初に会ったこの星の住民なのだ。」

「まあ、そうでしたの。」

女は、わずかに顔を背けた。

「これは返す。」

ミハイルは、女に着物を差し出した。

「ありがとうございます。」

女は、着物を受け取ると、3人に背を向け、着物を着始めた。

彼女は着物の下に何も着ていなく、乳首の形が外から分かった。それに常に胸の谷間が見えていたし、着物の丈は、彼女の膝より上だった。

「私は姫娥と言います。」

彼女は軽くお辞儀した。彼女の胸がえりからこぼれてこないか、3人は期待していたが、尻かと思われるほどの彼女の胸は、出てこなかった。

「私はミハイルだ。」

「俺はフェリクス。」

「私はユーリーと申します。」

3人は名前を名乗った。

「先ほどあなた方はこの星の住人ではないと言いましたが、何処からやってきたのですか？」

「惑星アリオナからだ。」

「まあ、聞いたこともないところからやってきたのね。」

「そこはここから遠いのですか？」

「宇宙船ではカプセルの中で寝ていたから一瞬だったが、惑星アリオナからここまで、ワープしても数十年かかる。」

「……。」

「まさかとは思いますが、私の話が分からなかったか？」

「ええ。実はよく分かりませんでした。」

「おまえたちはこの星を出たことはないのか？」

「ありません。」

3人は信じられなさそうに互いの顔を見た。

「姫娥と言ったな。この近くで自由に果物が取れる場所はあるか？」

「それなら、案内できます。」

3人は、姫娥の後をついて行った。

3人は歩きながら思った。惑星アリオナでは結婚相手が決まるまでSEXを禁止されていたが、ここはアリオナではない。それに目の前の女はいるだけで自分たちを挑発している。おそろく、何かどきどきするようなことが起こるのではないかと期待しているのだろう。

ああ、何度彼女の胸を掴み、薄い衣を剥がしてレイプしたいと思っただろうか。

「着きました。ここにある果物は自由に取っていいんです。食べられる分だけ取って下さい。食べられないものもあるので、私に断ってから食べて下さい。」

緩やかな丘の斜面に、果物の生っている木々がいくつも生えていた。3人は思った。これらの果実より、よく熟れている彼女の胸の方がうまいに違いない。3人は2メートル以上の巨体をしていたが、ミハイルとフェリクスは18歳で、ユーリーは15歳だった。まだSEXを体験したことがない3人だったが、SEXの知識は十分にあったし、少なくともミハイルとフェリクスはこの時すでに彼女を犯そうと決めていた。

一方姫娥には3人の心が読めていた。しかし、今のところ彼女は何もされていなかったの
で、逃げようとはしなかった。彼女は処女ではなく、出産経験もあった。彼女は3人の大男
の股間が膨らんでいるのを察しては、その大きさに驚き、自分の下半身が熱くなっている
を感じていた。

「あの、これは食べられますか？」

ユーリーは姫娥に赤い実を差し出した。

「ええ、食べられます。でも食べる時、汁が滴り落ちてくるので、気をつけてください。」

姫娥は言った。

「じゃ、これは？」

フェリクスは黄色い実を出した。

「これは生では食べられないでしょう。火を通して食べるものなので。」

「おい。あの紫色の桃のような果物は何だ？」

ミハイルは聞いた。

「あれは決して食べないで下さい。」

「毒なのですか？」

「いいえ。あの実自体は美味しいと言われています。しかし、あの実を食べると大変なこ
とが起こるのです。」

「大変なこと？何だ、それは。」

「私の口からは…。」

姫娥は恥ずかしがった。

「言え！言わないとどうなるか、分かっているんだろっうな？」

ミハイルは、手に持っていた硬い果物をつぶし、脅した。

「…あの実を食べると、男性なら、通常の何倍もの大きさに勃起して、誰これかまわずSE

Xしたくなり、長い間SEXを繰り返すのです。女性も誰これかまわずSEXしたくなるのは同じです。」

「そうか…随分危険な実なのだ。」

「ええ。決してあの実を食べたりしないよう、お願いします。」

「分かった。」

3人は再び果物を取るため、散らばった。

ユーリーは紫色の桃を取らなかったが、ミハイルとフェリクスはこっそりとポケットに入れておいた。

「姫娥！果物は十分に取ることができた。感謝する。それで礼をしたいのだが、我々と共に宇宙船に来てくれないだろうか。」

「宇宙船？」

「我々はそれに乗って遠い宇宙からやってきたのだ。」

「まあ、素敵ね。その船はどこにあるの？」

「ひとまず、平らで何もない所に案内してくれないか？」

「分かったわ。」

姫娥が何もない原っぱに3人を連れて行くと、ミハイルは腕にはめてある時計のようなもののふたを開け、ピンのようなものでボタンを何度か押した。すると、空中に宇宙船が現れ、3人の前に着陸した。そして、自動的に扉が開いた。

「…すこいわ。」

姫娥は目を丸くして、宇宙船を見上げた。

「さあ、お姫様。お手をどうぞ。」

「え？」

「冗談だ。」

ミハイルは姫娥を見て笑った。

「………」

ミハイルは姫娥の手を取ると、強引に宇宙船の中に入れた。

「我々の宇宙船によこそ。お前はこの船に乗ったドミモレエ星人第一号だ。」

「…ドミモレエ星人。」

宇宙船の中には部屋がいくつもあったが、どれも鍵がかかっているようだった。彼らは食堂に姫娥を案内し、ボタン一つで自動的に出てきた惑星アリオナ星の食事と水を、姫娥に差し出した。

姫娥は、手をつけずにしばらくその料理を眺めていた。

「どうした、食べないのか？」

「いいえ。ただずっと気になっていたんですが、あなた方はなぜマスクをつけているのですか？」

「これか？お前は我々にどうしてもらいたい？」

「…もしよければ外してくれませんか？」

姫娥がそう言うと、ミハイルはマスクを外した。それを見た二人もマスクを外した。

「……………」

姫娥は3人の顔を順に眺めた。

「お前は我々の中で誰が一番気に入ったか？」

「…私の口からは言えません。」

姫娥の頬が僅かにピンクに染まった。

4人は共に食事をした。しかし、食事中は一言も口を聞かなかった。彼らはいつも無言で食事をするらしい。

食事中、姫娥は3人の視線を感じた。彼女が前かがみになり、テーブルに当たったり、テーブルの上に乗ったりする度に胸がふるふるど動く様子に、彼らの目は釘付けになっていた。姫娥はそれがたまたまなく恥ずかしかったが、気づかないふりをしていた。

食事の後、ミハイルは言った。

「姫娥。」

「は、はい。」

「これから我々は大切な話をしなければならぬから、お前には他の部屋に行ってもらいたい。」

「よければもう帰りますけど。」

姫娥は3人の危険な男から早く離れた方がいいと思った。

「いいや。お前に聞きたいことはまだある。どうかこの星にいる間、我々と行動を共にしてもらえないだろうか？」

「あなた方はどれくらいこの星に滞在する予定なんです？」

「さてな。」

「……………」

姫娥は追い出されるように廊下に出た。まだ寝るには早い時刻だった。彼女が歩いていると、すぐ近くの部屋のドアが自動的に開いた。彼女はひどく驚いたが、その部屋の中に入った。部屋の中に入ると、ドアは閉まり、彼女がいくら開けようとしても、開かなかった。閉じ込められてしまったのだ。しばらくすると、天井からベッドがゆっくりと下りてきた。姫娥は2、3歩後ずさりした。ベッドの上にはタオルとパジャマらしき衣服が置いてあった。彼女は部屋の中を歩き回った。ベッドの他は何も無いように見えたが、机と椅子も壁から出てくる仕組みになっていた。それと、トイレとシャワー室も付いていた。シャワー室には椅子がついてあったが、湯船はなかった。

姫娥は軽くシャワーを浴びてからパジャマに着替えた。パジャマのサイズがあまりにも大きいので、姫娥は上着だけしか着なかった。何もすることのなかった彼女は、ベッドに横に

なることにした。

「なあ、あの女どうする？」

フェリクスは言った。

「お前は どうしたい？」

ミハイルはにやけた。

「俺は彼女と寝たい。」

「何を言っているんですか！何しにこの星に来たのです？」

ユーリーは怒った。

「この星に着たのは住民とコンタクトをとり、この星の住民の特徴を割り出すためだ。これが王になってアリオナから離れられなくなる前にする、最後の自由行動にもなっている。表向きはな。」

「他に目的ってあったか？」

「あつたさ。俺たちがアリオナに帰ってくる頃には親父が死ぬだろ。そうしたら俺は王にならなければならない。ついでに王には妃と息子がいないとなれない。この星で二つとも作っておけば、将来この星を植民地にして資源を調達したり、我々の星の住民を移住させることが可能になるかもしれない。」

「で、妃には誰を迎えるんだよ。もしかして、姫娥か？」

「確かにあいつはいい女だ。だがあいつはこの星にいる間の肉奴隷にする。」

「なんてことを言うのですか！」

ユーリーは立ち上がり、机を叩いた。

「お前にも姫娥とSEXさせてやるよ。」

「お断りします！」

ユーリーは怒って部屋を出て行った。

「フェリクス。あの紫色の桃、どうした？」

「ポケットに入れてあるままだけど、それが？」

それを聞くと、ミハイルはにやけた。それを見て、フェリクスもにやけたのだった。

フェリクスは、ユーリーの部屋に入った。ユーリーは机に向かい、日誌を書いていた。

「ユーリー、さっきは悪かった。姫娥を肉奴隷にするなんて言つてさ。あいつの胸見ただろ？すごい何のつて。あんな大きい女そうそういないだろ？」

「わざわざそれを言いに来たのですか？」

「いや、違っさ。謝りに来たんだよ。ほら、これでも食べて機嫌直せよ。」

フェリクスはさっきの紫色の桃の皮をむき、食べやすい大きさに切ったものをユーリーに差し出した。紫色の桃は、皮をむくと、中は黄色く、あの紫色の桃だとは分からなかった。

「…そこに置いてください。」

「分かった。じゃあ、日誌つけるのがんばってくれよ！俺たちはお前ほどまめにつけないんだしさ。」

フェリクスはユーリーの肩を軽く叩くと、部屋を後にした。

フェリクスは先ほどの部屋に戻ると、笑い出した。

「大成功！」

「喜ぶのはまだ早い。」

ミハイルは、ユーリーの部屋の監視カメラを見ていた。

ユーリーは、紫色の桃を食べ始めた。ミハイルとフェリクスは息を飲んだ。これから、絵にも描けない、すばらしく恥ずかしい淫乱劇場が始まるのだった。そうとも知らずユーリーは、次々と桃を食べていった。

30分もしないうちにユーリーは苦しみだした。彼の顔が赤くなり、息遣いが荒くなった。そして彼はベッドに横たわり、ズボンを下ろし、取り出したペニスを素早く手を動かしてしごき始めた。ユーリーのペニスは、みるみるうちに膨張していった。

「でかいな。」

フェリクスは顔を引きつらせて笑った。

ミハイルは立ち上がった。

「おい、どうするんだよ。」

「姫娥を呼ぶ。」

姫娥はベッドで寝ていたが、突然ドアが開き、ひどく真剣な顔をしたミハイルとフェリクスが入ってきた。

「ど、どうしたの？」

「ユーリーが大変なんだ！」

ミハイルとフェリクスは、姫娥を連れ、ユーリーの部屋に入った。

「まあ！」

姫娥は短く叫び、両手で目を覆った。

ユーリーのペニスが、黒い柱の様に目の前にそびえたっていた。

「あの実を食べたのね！」

「彼は俺たちに内緒で食べたらしい。」

ユーリーは、必死で首を横に振り、否定した。

「どうすれば元に戻るんだ？」

「…気が済むまでSEXする以外に方法はないわ。」

姫娥がそう言うと、フェリクスは彼女の両手を押さえた。

「何するの？」

姫娥が抵抗する中、ミハイルはパジャマのボタンを引きちぎった。彼女は胸をあらわにされ、巨大な胸は彼らの目の前でぶんぶん揺れた。フェリクスはパジャマの袖を掴むと、彼女を完全に裸にさせ、ユーリーのいるベッドの方に突き飛ばした。

「きゃあっ！」

姫娥はユーリーにぶつかり、巨根を挿んでしまった。

「気が済むまでやってくれよ、お二人さん。」

ミハイルは笑った。

「兄さん！あなたを恨みますよ。」

ユーリーは歯をくいしばって、悔しがった。

「私、こんなに大きいが入らないわ。」

姫娥は泣き叫んだが、ミハイルもフェリクスも椅子を出して見物していた。

ユーリーの髪は、汗で濡れていた。彼は興奮しながらも姫娥とSEXしまいとがんばっていた。しかし、裸の彼女が目の前にいるのに、何もしないというのは、不可能な話だった。紫色の桃を食べてしまうと、理性さえもどこかに行ってしまうのだ。

ユーリーは、ペニスをそっと彼女の股間に当てた。

「きゃっ！」

姫娥は両目を閉じた。

ユーリーはゆっくりと股間に当てた。ペニスを離れた。離れた際、ねばねばした液が、彼女の股間から出てきた。ユーリーは、いきなり姫娥の右足をつかみ上げ、彼女はベッドの上に背中をたたきつけられ、仰向けになった。ユーリーはすばやく彼女に飛び乗ると、ペニスを彼女の中に挿入させようとした。

とその時、姫娥は足を伸ばし、寸での所で血管を浮き立たせた熱いものが入っていくのを防いだ。が、彼女の足の先は、彼の玉に当たっていた。彼はますます興奮して、無理矢理ペニスを挿入しようとした。

「いやあっ！」

姫娥は必死で足を伸ばし続けたが、足がますます彼の玉に食い込み、彼は腰を動かし始めた。そして、彼女の片足が滑り落ちた瞬間を狙って肉柱を挿入した。姫娥はものすごい叫び声をあげた。ユーリーは彼女を串刺しにし、天井に上げる勢いで突き上げた。姫娥の胸は激しくゆれ、あそこからは信じられないほどの精子があふれ出た。

やがて姫娥は口から泡を吐き、気を失ったが、それでもユーリーは彼女を突き動かし続けた。夢中で彼女の胸にしゃぶりつき、出てきた乳を吸った。

ミハイルもフェリクスもそのものすごい光景に、一言も口を聞くことができず、さきほどから石化していた。

ユーリーの暴走は、朝まで続いた。

ユーリーが正気に戻ったのは、翌日の夕方だった。彼は裸で横たわっていた。シーツには

おびただしい量の精液の跡と、姫娥が出したと思われる血がついていた。彼女は、血が出る程擦りつけられたのだ。ユーリーは、昨日の悪夢としか思えない出来事を思い出して、発狂した。そのうめき声はミハイル、フェリクス、姫娥の耳に入った。ミハイルとフェリクスは無視した。今二人がユーリーの前に現れたら、喧嘩になるだけでは済まされなれなと思っただけだ。ユーリーのうめき声、泣き声は長いこと続いた。

姫娥は恥ずかしくて、ユーリーはもちろん、ミハイルとフェリクスの前にも出来なかつた。彼女の部屋の扉は、だいぶ前から開いていた。おそらく、食事の合図のためにドアが開けられたのだろう。彼女は、食卓に姿を現さなかつた。姫娥は、ベッドに横になりながら、ユーリーのうめき声を聞いていた。

しばらくすると、姫娥は昨日着ていた着物に着替え、廊下に出た。すると、ある部屋のドアが開き、姫娥はその部屋の方に向かった。

「誰だ！」

ユーリーが振り向くと、ドアのところに姫娥が立っていた。

「……………」

姫娥は、何も言わずにユーリーを見ていた。ユーリーは、毛布をかぶり、彼女に背を向け、黙った。

姫娥は部屋の中に入り、彼が寝ているベッドに座った。

「気分はどう？」

「最悪。」

「そう。可愛いそうに。」

「可愛いそう？」

「ええ。」

「あなたの方が可愛そうなはずですよ。」

「そうね。でもあなたがとても気の毒で。」

姫娥はユーリーの足を撫でた。彼の体が動いた。

「昨日のことなら気にしていいわ。だからそんなに苦しまないで。」

「…どうしてですか？被害者はあなたなのに？」

「あなただって被害者のはずよ。」

ユーリーは起き上がり、姫娥を見た。

「私を許してくれますか？」

「ええ。」

「またあなたを襲うかもしれませんよ？」

「…困ったわね。でも、あんなに大きくしなないって約束してくれたら、考えてあげてもいいわ。」

姫娥がそう言うと、ユーリーは恥ずかしくそうに顔を伏せた。しかし、顔を上げたと思うと、彼は姫娥の胸に顔を埋めた。

「しばらく…こうしていいですか？」

ユーリーの声は震えていて、目からは涙が出ていた。

第二節 惑星アリオナへ

ミハイル、フェリクス、ユーリーはアリオナ星の王子だった。彼らの遠い祖先は、ここ、惑星ドミモレエから移住してきたという。惑星ドミモレエの古代人は18歳で成人すると、そのままの容姿を保ったまま、100歳まで生きる。彼ら古代人は、陸以外にも、海底、海中で生活していたが、人口が爆発的に増加したため、一部の人たちは移住できる星を求め、宇宙に旅立ったのであった。しかし、それから突如として彼らの文明は滅んだ。彼らには何故高度な文明が滅んだのか、理解できないでいた。そして、同時に今この星に生息している人類についても知る必要があった。ミハイル王子は学者ではなかったが、王になり自由がきかなくなる前に、独自に惑星ドミモレエについて知ろうと思ったのだった。そして、弟のフェリクス王子、ユーリー王子を連れて惑星ドミモレエに来たのである。彼らは3人だけでここまで来たのではない。惑星ドミモレエの大気圏のはるか上空に、部下たち百数名が乗った母船が待機し、彼らの帰りを待ち構えているのである。

一方、そんな彼らと強制的に行動を共にするようになった姫娥は、彼らアリオナ星人から見れば人間とは言いがたかった。彼女は不死身の人魚であり、その時すでに2000年以上生きていた。彼女は3人ほど子供を出産していたが、夫はいなく、子供は3人も捨てていた。実は人魚は性欲が旺盛なため、近親相姦も珍しくないという。なので、彼らは生まれてくる子供を自分で育てないようだ。三人の王子は惑星ドミモレエの住民を妖精と呼んだ。妖精には、人魚のように人間と動物の混合した姿と、全くの動物とがいた。いずれも言葉をしやべり、文字を使った。彼らを使う言語は、古代人が使っていたものと同じで、恐らく古代人は急には滅びず、妖精と共存していた時期があったのだろう。残念ながら、古代人の高度な文明はしっかりと妖精に受け継がれなかったが、言語と宗教は受け継がれたようだ。この星の唯一神であるプラネシアンは、太古の昔から存在していた。

姫娥は3人の王子と肉体関係を持つようになった。最初の夜に暴走したユーリーを相手にして以来、ユーリーとの間に恋愛感情が芽生えた。しかし、それを面白く思わなかった2人の兄は、彼女に会って3日後に彼女を襲った。姫娥は二人の兄にはよく無理矢理やらされた。2人のSEXは激しく、痛かった。彼らの精子はまずく、まずい上に彼女の口の中や、膈の中に入れたがった。ユーリーは唯一優しくしてくれたが、彼は2人の兄に逆らえず、姫娥を2人の兄から守ることができなかった。彼女は3人に輪姦されることもあった。二人のペニスをもちやを携帯していたらしく、口にもくわえさせられた。また、3人のうちの一人が自慰用のおもちゃを携帯していたらしく、それを使っていたぶられもした。彼女はそれで刺激されると、面白いほど汗を出し、3人はタコのように吸い付いた。姫娥にはSEXしない日などなかった。それでも彼女は妊娠しなかった。

「姫娥、何故お前は妊娠しない？」

彼女に妊娠して欲しかったわけではないが、疑問に思ったミハイルは尋ねた。

「妖精は不死身です。でもそれではこの星が妖精で埋め尽くされてしまいます。そこで妖精の出産率は人間と比べて低くできているのです。SEXしたからといって妊娠はしません。」

「お前はたしか3人ほど子供を産んだと言ったな？どうして妊娠に成功することができたのだ？」

「思いの力です。」

「思いの力？」

「ええ。妖精はSEXした相手の子供を産みたいという思いによって妊娠します。」

この時ミハイルは、何を思ったのか、こう言った。

「姫娥、私の子供を産んでみないか？」

「え？」

「私はお前の子供をアリオナ星の王にしたい。」

ミハイルは姫娥を見つめた。姫娥は彼の心を知ろうとした。彼は一見本気だった。しかし、姫娥にとってこの提案は、信じられない話だった。

「もし私があなたの子供を産んだら、私は用なしになりますか？」

姫娥は心配そうにミハイルを見上げた。

「いや、私はお前をアリオナ星に連れて帰り、妃に迎え入れたい。」

「まあ、困るわ。この星を出るなんて。私には無理です。」

「そんな事はない。我々の遠い祖先も、そうやって不安にかられながらも宇宙に進出したのだ。」

「でもなぜ私なの？」

姫娥が顔を背けようとすると、ミハイルは彼女のあごを軽く持ち上げた。

「姫娥、私を困らせないでくれ。」

そして、優しくキスした。姫娥は、彼がこんなに優しいキスをしてくれるとは思わなかった。普段から優しいユウリーに優しくされるより、とげとげしい感じのミハイルに時々優しくされる方が彼女には嬉しかった。その日から姫娥はミハイルだけのものとなった。フェリクスとユウリーは黙って彼に従った。こうして姫娥は男児を出産した。赤ん坊はリゲルという名前だった。人魚には天体の名前がついている。それは、水面を跳ねる魚が、夜空を飾る星に似ていることに由来する。ミハイルは生まれてきた子供が人魚だという事に一際喜んでいた。妖精として生まれた以上死ぬことはない。だからアリオナに不滅の皇帝が誕生するのだ。ミハイルはよくその話を姫娥にした。彼女は王様となったリゲルの支えになって欲しいと言われた。姫娥はそれがうれしかった。彼女は今まで子供を育てたことがなかったが、今度こそはっきり育てることができるような気がした。

古代文明が滅んだ原因についてははっきりとした答えが出せなかったが、この星の住民に

ついでには十分な知識を得ることができた。彼らは争いを好まず、うまく自然と共存していた。物質的には豊かとは言えなかったが、精神的に豊かで、ミハイルたち人間よりも、神に近い存在に見えた。彼らは人間にはできない数々の不思議な能力を兼ね備えており、3人の王子にはすばらしく映ったが、そのすばらしい能力があったせいで、かれらの文明は古代人に比べ、随分と劣るものになってしまい、彼らは原始的と言っている生活をしていたのであった。フェリクスとユーリーはミハイルの様に妖精を妻に持とうと思いい、妖精の女に近づいたが、彼らは水の中に潜ったり、空を飛んだりできるので、簡単に逃げられてしまった。彼らとSEXしたがる妖精はまずいなかった。人魚は別だが、妖精は性欲が旺盛ではなく、SEXにのめりこむことがない。これはこの星を妖精が埋め尽くさないようにするためにそうなっているのだ。フェリクスとユーリーは、仕方なく人魚の相手をしたが、彼らの精子がまずいとされ、嫌われてしまった。姫娥以外の人魚は、皆思ったことをはっきり言う者ばかりで、えらく彼らを失望させた。

リゲルが誕生して1年が過ぎた時、3人の王子は姫娥と子供を連れ惑星ドミモレエを後にし、アリオナへと出発した。5人は母船に到着すると睡眠カプセルに入れられた。彼らは十数年間の退屈な宇宙の旅を寝て過ごすのであった。またカプセルの中で寝ている間は、年をとらないようにできているので、宇宙旅行の移動の際には、たいていカプセルの中に入った。ミハイル王子の百数名の部下たちは、その間、交代で起きて船を動かした。

第三節 夢見た後で

カプセルが開き、姫娥が目を開くと、そこにミハイルの姿はなかった。彼女は周囲の仮面をつけた巨人に言われるまま、服を着替えさせられ、髪型も変えられた。そして、王様の前に連れて行かれた。姫娥はきつとミハイルが自分を待っているのだと思った。彼女は王様の前で、土下座するように言われたので、彼女は王様の顔を見ることができなかった。

「顔をあげてもよいぞ。」

王様らしき人の声が聞こえた。ミハイルの声ではない気がした。しかし、彼女は十数年も眠らされていたので、彼の声を忘れたのだと思い、顔を上げた。

目の前の玉座に座っている王様は、ミハイルではなさそうだった。玉座の両隣には巨大な人魚の石像が並んでいた。随分と巨乳の人魚だった。

「あなたが目覚める時をずっと心待ちにしていました。今やっと長年の夢がかなって私はうれしい。さあ、もっと私の近くによつてくれぬか、母上。」

「…母上？」

姫娥は目を丸くして王を見た。彼は他のアリオナ星人同様、褐色の肌に赤い髪をしており、緑の瞳をしていた。おまけに2メートル以上の長身であるところまで他のアリオナ星人と同じだった。姫娥はこの男を知らなかった。

「あなたのことですよ、母上。」

王は笑った。姫娥は恐る恐る彼に近づいた。

「リゲル？リゲルなの？」

姫娥の声が震えた。彼女が眠っている間に、赤ん坊だったリゲルは大人になってしまったのだった。

「そうです。あなたの息子のリゲルです。こうやって話ができる日がやってくるなんて、夢のようだ。さあ、ここに座って下さい。」

リゲル王は、自分の膝を叩いた。姫娥は戸惑いながらも彼の膝に座った。

「捕まえた！」

リゲルはがっしりした手で姫娥の胸を鷲掴みにし、抱きしめた。「きゃあっ！」

彼女はもがいたが、彼の腕はたくましく、離れなかった。

「母上。あなたは300年以上も眠らされていたのですよ。」

リゲルは耳元でささやいた。

3人の王子が姫娥と彼女の息子のリゲルを連れて惑星アリオナに帰還した時、この星では盛大な祝賀会が催された。その祝賀会で、王が独自に決めたミハイル王子の婚約者が発表されたのだった。リゲルはカプセルから取り出され、信用できる部下に育てられたが、未来の妃が決められてしまった以上、すぐに姫娥をカプセルから出すわけにはいかなかった。ミハイルは気が乗らなかったが、姫娥を隠し、妃を迎い入れた。妃は、男児を生み、王の死後、ミハイルは新たな王になった。そしてミハイルの死後は、ミハイルと妃の間に生まれた子供が王になったのだが、ミハイルにはもう一人息子がいることが世間で噂され、リゲルを王様にさせるという者と、今の王様のままでいさせるといふ者として意見が分かれ、口論になった。そして、ミハイルと妃の息子の死後、リゲルが王の位に就いたのであった。しかし、王になったからといって、姫娥の存在は未だ一部の人間にしか知られていなく、すぐに彼女を起すことはできなかった。

リゲルには妻が何人もいた。裕福な暮らしがしたいと願うアリオナ星中の美女が毎日のように宮殿に押しかけ、夜は彼の寝室の前で列を作る始末だった。王の子供を身ごもった女は例外なく妃の位を手に入れることができた。アリオナでは、王だけが複数の妻を持つことを許されていた。妖精は出産率が低いはずだが、人魚の並々ならぬ性欲のせい、子供を産むのが人間なせい、リゲルの子供は50人近くいた。そして子供たちはアリオナ星の各地域を治める者になるためにしっかりと教育された。しかし、最終的には優秀な者だけが重要なポストにつけた。

さて、それまで彼の子供は全て人間として生まれてきた。しかし、ある日突然人間ではない子供が生まれたのであった。リゲルは人間ではなく、神に近い存在であると崇められていた。この星では、リゲルが王になった頃から、プラネシアンを使いとして人魚が登場するようになった。皇帝が人魚であることは、伝説のようになっていて、本気で信じられていなか

ったし、彼も人前では人魚の姿にならなかった。しかし、彼以外にも人魚が生まれてしまったのであった。彼は子供が女ならそのまま自分の娘として育てようと思ったが、男だったので、姫娥を起こして彼女に息子を託そうとしたのだった。本当の母親は化け物が生まれたと思いい、彼をそのままにして蒸発してしまった。が、彼女はお腹にいる時から彼を『レオニード』と呼んでいたもので、彼の名前はレオニードとなった。

姫娥はレオニードの母親となり、本当ならリゲルに注ぐはずだった愛情を彼に注いだ。彼女は300年以上も眠らされていたことがショックでしばらく立ち直れなかったが、日々成長していくレオニードの姿に随分と救われた。

第四節 まぼろし山

リゲル王の住む宮殿は、空中都市の上に建っていた。王は、遙か彼方の上空から、人々を支配していたのだ。レオニードは、そんな空中都市を建設する技師となった。

姫娥は専用の空中都市を造ってもらい、そこに建てられた宮殿にレオニードと一緒に住んでいた。彼女は専用のプールまで作ってもらったにもかかわらず、うれしそうではなかった。彼女は何をあげても淋しそうで、退屈していた。特にレオニードが手がかからなくなってしまう、何もすることがなかった。レオニードと違って彼女は王様に会いに行く時以外は、この空中都市から一步も外に出ることが許されなかった。

「母上、あなたは どうして毎日 哀しい顔ばかりしているのですか？」

「レオニード。…私はいつものこんな顔をしているのよ。」

「あなたの哀しんでいる顔は美しい。しかし、嬉しそうな顔はそれに勝る。そう思いませんか？」

「そうね。」

姫娥は僅かに微笑んだ。

彼女は独りである時、いつも本を読んでいた。この星の文字が、惑星ドミモレエと同じでよかったと彼女は思った。しかし、この星は故郷の星とは違いすぎた。空気は乾燥しており、雨が少ないせいか、広大な砂漠がそこら中に広がっていた。一部のアリオナ星人がつける仮面には未だに慣れなかった。仮面をつけている人が皆同じ人に見えて、怖かった。この星で彼女一人だけが肌が白いというのも、彼女を孤独にさせていた。

レオニードが50歳になった時、彼は久しぶりに父親である王様に呼び出された。

「父上、何の用ですか？」

「レオニード、母上の様子は どうだ？」

「それが どうも 気分が 優れない ようです。」

「そうか。ではそろそろ かもしれないな。」

「そろそろ と言いますと？」

「彼女を惑星ドミモレエに還す時が来たということだ。」

「なんだって!」

レオニードは真っ青になって言った。

「どうしてですか?確かに彼女はこの星の人間ではないですし、そうした方がいいかもしれませんが。しかし、彼女は私の母親です。彼女がいなくなったら、私はどうなるのですか?」

「レオニード。私はお前に彼女と共に惑星ドミモレエへ行ってもらいたい。」

レオニードは震えた。

「私はもう必要のない人間なのですか?」

「いいや、違う。私はお前に彼女を守ってもらいたいのだ。己の使命を忘れてこの星に帰ることは許さん。それとドミモレエに行く際には、技術者や部下を50人まで連れて行ってよい事にする。そこで死ぬ覚悟がある者だけ行かせろ。」

「…分かりました。」

レオニードには恋人がいなかった。彼は姫娥に、普通の息子が母親に対する愛情以上のものを感じていた。彼は彼女がいればどこに行ってもかまわないと思っていたし、故郷を離れ、別の星に行くことを少しも恐れていなかった。

こうして、一年後にレオニードと姫娥は50名の部下を連れて惑星ドミモレエへと旅立った。姫娥は、故郷に帰れると聞いた途端、元気になった。さすがにいざ旅立つ時になると、心残りがあるような表情を見せていたが…。

「母上、お元気で。」

リゲルは言った。

「あなたも。」

姫娥は目に涙を浮かべていた。彼はあと何年皇帝をやっていないなければならないのだろうか?

「そんなに悲しまないでください。こういう時こそ笑うべきですよ。」

リゲルは言った。

「そうね。」

「レオニード、母上を頼む。」

「分かりました、父上。」

この様子は、アリオナ中に中継された。姫娥とレオニードが旅立つことが決まった一年前から、姫娥は世間で注目されるようになり、彼女の過去。レオニードの事。彼女と3人の王子との間に起きたことまで人々に知られるようになった。彼女を見に遠方からやってきた人もおり、彼らは大勢の人々に見送られ、旅立った。

「母上、皆カプセルの中に入っていますが、あなたは入らないのですか?」

「…私はいいわ。だって今度目が覚めた時には、何百年後になっているか分からないもの。」

「何百年もかかりませんよ。もう誰もあなたをそんなに待たせません。」

レオニードは笑った。

だが姫娥はカプセルの中で寝ようとはしなかった。彼女は二度とあのような事があって欲しくなかったのだ。彼女がカプセルの中に入らないので、レオニードも入らない事にした。「これから十何年もこの宇宙を漂っているのね。あなたには退屈じゃないかしら？」

「いいえ。母上が傍にいてくれれば、退屈ではありませんよ。それに私たちには死や老いがありません。一瞬も永遠も同じ事なのではありませんか？」

「…そうね。」

二人は宇宙空間を眺めた。

姫娥は約400年ぶりに惑星ドミモレエの地を踏もうとしていた。彼女は窓から青い星を眺めていた。

「レオニード王子。アレをやるのですか？」

「はい、地形を変えるわけにはいきませんかね。」

レオニードは、部下と、何やら話していた。

「ではあの一番小さい衛星を狙いますよ？」

「そうして下さい。」

レオニードがそう言うと、部下はボタンを押し、ロケットが発射され、衛星は粉々に打ち砕かれた。次に光を発するエネルギー体が宇宙船から発射され、衛星の破片を吸い取り、再び球体を作った。そしてもう一度ロケットのようなものが発射され、球体は捕らえられたのだった。球体は着陸した宇宙船に引きずられ、地上に衝突すると思われたが、そのまま空中に浮かんだ。

こうして出来た浮島は、後にまぼろし山と呼ばれた。一番小さな衛星を原料に作ったまぼろし山だったが、頂上は4万平方キロメートル以上あった。レオニードはまぼろし山を逆三角形の山にし、頂上の一角に玉宮を造り、姫娥を住ませた。彼の部下たちも、まぼろし山に住んだ。その時姫娥は約3000歳だった。

まぼろし山は地上に住む妖精たちの反感を買った。彼らはレオニードと姫娥がこの星を支配する王になった気分だと思いき、まぼろし山に登り、文句を言いに行こうとした。だが、まぼろし山に行くのは容易ではなかった。翼の生えている妖精も、飛べる高さには限界があった。しかしそれでもまぼろし山まで来る妖精はいた。姫娥は宮殿を妖精に荒されるなどの嫌がらせに遭ったし、無断で宮殿に住む妖精まで現れた。

リゲルはかつてのミハイルの様に惑星ドミモレエを植民地にしようとは考えていなかった。古代人とは違った人類と文明が息づいている以上、惑星ドミモレエに再び古代文明を甦らせる事などしない方がいいと判断したのである。それにアリオナとドミモレエを往復するようになれば、それだけ経費がかかり、人民一人一人の負担が重くなると思ったのだ。不滅の皇帝は一見民の信頼を得ているようだが、得続けるのは、難しかった。彼は人の心が読め

るので、部下が何を考えているのか分かったし、自分に賛成しているかどうかもすぐに分かった。彼はだいたい前から、この星を支配しているのは、自分ではなく、人民であると思っていた。

レオニードがまぼろし山を造り、そこに住み始めたのは、空中には妖精が住んでいないので、突然50数名がそこに住み始めても文句は言われなれなれと思っただけだし、姫娥には玉宮に住んでもらいたかったからである。しかし、巨大な空中都市を造ってしまった彼らは、神への挑戦だと思われた。当然の事ながら、嫌がらせはエスカレートしていった。

「レオニード！このままでは私たち地上に叩き落されるわ！」

「そんな事はさせませんよ。」

彼らはどうしたら住民たちの反感を受け入れずに済むのか、話し合った。

そして数年後、まぼろし山の上に遊園地が建った。名前は『フェアリーランド』と言った。後に、まぼろし山のある大陸そのものがフェアリーランドと呼ばれるようになった。フェアリーランドに隣接して、ホテルと銀行もつくられ、百貨店、工場、病院、博物館、劇場、学校等が建てられ、鉄道等も建設された。そして、まぼろし山行きの空飛ぶ船が、毎日運航されるようになった。まぼろし山には全てがあつた。こうして、まぼろし山は、地上の妖精たちに受け入れられ、後のフェアリーランドの象徴となった。まぼろし山の玉宮には、王様とお姫様が住んでいるという、お話までつくられるようになった。

第五節 息子と

姫娥が4000歳になった頃から、人間が登場した。人間は、妖精よりも出生率が高かつた。それでも一人の女が産む子供は、多くて3人で、普通は一人だったが、彼らは子孫を残すまで若いままの状態を保っている。確実に増えていった。最初妖精たちは人間たちを愛人のように扱っていたが、人間との子供を作っていくうちに、妖精の数が人間と比べ、少なくなる事に気づき、一部の妖精は人間とは別の地で住むことを希望した。彼らは、まぼろし山のある大陸だけは、人間を入れさせないように決めた。彼らはレオニードと協力し、人間たちが入って来ないように、大陸を巨大なドームで覆う計画をたてた。ドームに覆われると、フェアリーランドは空からも周りの海からも見えないし入れないようになる。妖精は皆瞬間移動ができるので、妖精だけがフェアリーランドと他の大陸を行き来できることになるのだ。もちろん、そのようなドームを建設するのは並大抵のことではなかったが、妖精たちは真剣だった。それからドーム建設の指導者となったレオニードは、次第に姫娥と話す機会がなくなってしまう、実際にドームが建設されるようになって彼女が一人になってしまった。姫娥は6000歳になる頃には、地上に降りていた。地上で彼女は、かつてのようによくレイプされていた。と言うのも、彼女は今『純愛禁止区域』という標識がついた森の中にいたのだ。レオニードは姫娥がいなくなったことを知ると、捜索隊を出すだろうが、この森の中までは探さないだろうと、姫娥は思っていた。純愛禁止区域にいる者は、誰でもS

SEXしていいという決まりになっている。彼女はレオニードといた頃はSEXなどすることができず、オナニーさえも許されなかったので、彼女はレイプされる時のスリルを楽しんでさえいた。しかしSEXが終わり、ゴミのように捨てられた時、彼女は無性に淋しい思いをした。彼女は何人か恋人を作ったが、どれも長続きしなかった。

ある時彼女は、狼たちにレイプされていたところを助けてくれた青年と恋に落ちた。青年の名前は『ブライト』と言った。

彼は木に登り、熟れた果実を食べていた。彼を下から見上げた姮娥に対し、彼は果実を彼女に投げ与えた。彼女はうまく取ることができず、果実の汁が胸にかかってしまった。ブライトは謝りながら、地上に下り、彼女の胸にかかった汁をなめ始めた。

「ああつ、やめて、ブライト♡」

ブライトは彼女の乳首を舌でなめ始めた。そして、彼女を抱き、自分の下半身を擦り始めた。純愛禁止区域では裸であることが多いせいか、ブライトはほとんど裸で、ペニスが勃起しているのがよく分かったし、ペニスが勃起するとよくはみ出て見えた。

ブライトは後ろから勃起したペニスを姮娥の股間にこすりつけた。同時に姮娥は乳首を引っ張られ、もまれた。そして、舌で首筋をくすぐられ、思わず震えた。

「ブライト、早く入れて！」

姮娥がそう言ってもブライトは無視し、今度は彼女の股間に顔を埋めてちゅばちゅば吸い付くように陰唇をなめ出した。ちよんどのいい量の汁が出ていたのだ。ブライトは、汁が足りないと思うと、よく親指でクリトリスをぐりぐりとかき回し、同時に指を膣に何本か入れて奥からかき出した。姮娥は腰をピクピク震わせ、淫乱な声を漏らしながら喜んだ。

ブライトはよく、彼女の大きすぎる胸を後ろから掴んで、こう言った。

「君の胸は大きすぎる。このままだと垂れてしまうよ。だからこうして俺が抑えていないといけないね。」

そう言いながらも彼はペニスを差し込んでいた。

彼は木に姮娥の両手を縛りつけ、彼女を目隠しして襲うのが好きだったし、アナルセックスもした。

姮娥はこの時、SEXばかりやっていて、レオニードの事や、アリオナ星にいるリゲルの事、はるか昔に産み落とした3人の子供のことなど考えなかった。彼女はSEXしている時が一番幸せで、愛に生きていくという気がした。

「姮娥、俺の子供を産んでくれないか？」

ある日顔の上に彼女の胸を乗せたまま、ブライトはつぶやく様に言った。そして、姮娥は妊娠した。ある日ブライトは生まれてきた子供をどう育てるかについて姮娥と話したが、姮娥は生まれた子供を育てるつもりはないと言った。子供がいる間、よい母親を演じていなければならぬし、その間SEXができない。SEXを子供の前でしたりしたら、子供も自分とやりたがり、近親相姦になってしまうだろうと思ったからだ。それにリゲルのようにい

ずれ別れる定めなれば、最初から子供と一緒にいない方がいいと、姫娥なりに思っていた。しかし、ブライトはそうは思わなかった。姫娥は妊娠中SEXをしたがらず、ブライトとはよく喧嘩になった。そして子供が生まれる前に二人は別れてしまったのであった。姫娥は自力で子供を産み、海へ捨てた。

それからの彼女は、妖精のあまり住まない森に家を建て、一人で暮らした。

ある日、姫娥は傷だらけで倒れている裸の少年を森で発見した。人間で言うところ6歳くらいの少年だった。彼女は彼を自分の家まで連れて行った。少年は『六連』と言った。

少年は彼を育ててくれた人魚の肉奴隷で、バター犬のようなことをしていた。彼は母親であり姉代わりだった人魚の大きな胸が大好きで、乳を吸わせてもらう代わりに、舌で女性器を刺激するように命じられていた。ある日、彼女が純愛禁止区域での乱交パーティーでSEXしているのを見た少年は、自分も彼女とSEXしようと試みたが、断られてしまい、怒って彼女の乳首を噛み切ろうとし、傍にいた父親代わりだった人魚に半殺しにされ、ふらふらになりながらも陸に上がり、ここまで逃げてきたのだった。

六連は姉代わりだった人魚よりも胸の大きい姫娥に目をつけ、彼女をレイプしようと思った。胸をもんだり、彼女のスカートの中に入り性器をいじったりするだけならまだよかったが、彼女の服を乳首や性器が見えるように切り取ったり、性器の中にペンを差し込んだりと、ことあるごとに痴漢行為を繰り返した。姫娥は痴漢される度に、感じていた。そしてある夜、寝ている少年のズボンを下ろし、ペニスを自分の中に入れようとしたのだ。

「へえー、こんなふうに使うんだ、それって。僕初めて知ったよ。」

少年は起きていた。

「裸になってよ、姫娥。やろうよ、SEX。」

姫娥はこんなに小さい少年とするのは初めてで、罪悪感さえ感じていた。少年は、少しも恥ずかしがらずに、彼女とプレイしていた。姫娥は少年に勉強を教える事にした。少年は勉強中でさえ、彼女の体を触ろうとした。姫娥も、いつ触られるか、わくわくして、触られた時によく黄色い声を発した。姫娥は家にいる間、六連に裸にさせられた。六連はただ彼女の体を眺めていて、姫娥は恥ずかしく思いながらも、それを楽しんでいった。夜は二人で裸になり、六連は窒息しそうになりながらも、姫娥の胸に顔を押し当て、姫娥の股に両足を挟んで寝た。姫娥は六連のペニスを挿んで寝た。彼女は大人になる前の男の子のペニスに強い関心を示し、六連のペニスでよく遊んだ。彼に紫色の桃を食べさせ、彼の体を観察したりもした。非常識ではあったが、姫娥は毎日が楽しく、幸せで、それは六連にとっても同じだった。

しかし六連が大人になり、ある疑問が浮かんできた。

「この子は私の子供ではなからうか？」

六連に自分と会う前の話を聞いたりしていくうちに、だんだんとそう思うようになった。そして彼の顔を見ていくうちに、その疑問は疑いのないものとなった。しかし、六連は依然

として彼女を慕っており、急に態度を変えることなど、彼女にはできなかった。それに彼女は自分を喜ばせようとがんばる彼がかわいくて、いじらしくて、仕方なかった。そして何百年ものあいだ、実の息子とのSEXを楽しんだ。そして、妊娠した。

そこで彼女は我に返った。彼女は息子の子供を産んではいけないと思った。そして、裸で寝ている六連を残し、まぼろし山へと帰った。

「母上！今まで何をしていたのです？」

レオニードは姫娥を見るなり、叫んだ。

「ちよつとね…。」

「どこがちよつとなんですか！あなたがいなくなつて数千年が経っているのですよ。」

「ごめんなさい。7000年も生きていると時間の感覚がなくて。ここを出たのが昨日の様に感じるの。」

「ああ、そうですか！」

レオニードは呆れていた。

「そう言えば、この大陸はもうドームで覆われたのかしら？」

「工事はとつくの昔に終わりましたよ。空を見上げていなかったんですか？工事が終わった時は大分騒がしかったはずですよ？」

「あら、そうだったの。気がつかなかったわ。」

姫娥は久しぶりに会ったレオニードが今まで何をしてきたのか、何度も何度も聞いてくるので、うつとうしく感じていた。一方レオニードは久しぶりに会った姫娥が以前より太つて見え、動きも鈍く見えた。姫娥は自分の部屋の引き出しをあさり、何やら必死で捜していた。

「何を探しているのですか？」

「薬よ。」

「薬？薬なら一箇所にまとめましたけど、何の薬ですか？」

「私の口からは言えないわ…。」

姫娥は恥ずかしがった。レオニードはとりあえず薬のしまっているところに、彼女を案内した。

薬は棚の上に並んでいて、同じ大きさの瓶に入れられていた。

「まあ、こんなに薬があるの？これではどこに何の薬があるか分からないわ。」

「ですから、何の薬を探しているのか聞いたんですよ、母上。」

「…でも言ったらレオニードは私を怒ると思うのよ。」

「怒りませんよ。」

「本当？」

「本当です。ですから、話してください。」

「実は今妊娠しているみたいなんですけど、お腹の子供の成長を遅らせる薬がなかったかし

ら？」

「ええっ！妊娠しているんですか？」

レオニードは大声で叫んだ。

「静かにして。」

「お腹の子供の成長を遅らせても、無駄ですよ。いずれ子供は生まれてしまいます。」

「でも妖精は中絶とかできないでしょ。だからせめて出産日を遅らせるのよ。千年くらい出産日が延びるといいんだけど。」

「千年もお腹に子供を入れとくなんて、不可能ですよ！」

「でも今産むわけにはいかないのよ。」

「何故です？」

「それは……」

姫娥はこれまでの事を息子に話した。レオニードは呆れていて、彼女以上に実の息子の子供をやらんでしまった事を嘆いていた。

「母上、産んでくださいよ。」

レオニードは苦笑いしながら言った。

「嫌よ。」

「どうしてです？一緒に育てましょう。」

「近親相姦で生まれた子供がまた近親相姦になったらどうするの？」

「は？」

「私はこの子を産むつもりはありません。もし産んでしまったら、この子をここから地上に落としてしまうかもしれないわ。」

「……言っときますけどね、あなたが今子供を産んでも、数十年後に産んでも、同じ事ですよ？」

「そうでしょうね。でも私はすぐに産むつもりはありません。産みたくないのです。自分の息子との間に生まれた子供を見たら、また彼に会いに行ってしまうそうなんですもの。そして、あの子がどんな顔をするか、考えただけで憂鬱になってしまうわ。私は六連の顔を忘れてからこの子を産みます。もちろんこの子を育てるつもりはありませんけどね。」

姫娥はそう言って、約三百年間もお腹に子供をばらまかせていた。

第六節 ささやかな復讐

この頃、人間の数と妖精の数は逆転していた。妖精たちの多くは、フェアリーランドに住んでいるものを除き、別の世界へと旅立った。それは、この世界と同時に存在する世界で、パラレル・ワールドと呼ばれていた。モンスターによって人間世界と妖精世界に住む妖精の数は激減された。モンスターに吸収された妖精たちは、パラレル・ワールドへ飛ばされた。パラレル・ワールドには、死んだ人間の魂も行くということから、そこを『あの世』と言う

者が多かった。あの世がどうしてできたのか、知るものはいないし、あの世へ行くべき妖精以外、そこへの行き方は分からない。しかしあの世に住んでいる者を、一時的に呼び出すことのできる者が一人だけいた。それが姫娥だった。

妖精は、自らの力を持って余していた。そこで天帝は、妖精たちに人間の守護をすることを命じた。妖精が人間を守護し、人間を無事にあの世に送り届けることができれば、妖精に新たな能力が備わることになった。そして、子供を作った妖精も、新たな能力が備わると言われた。

さて、妖精たちは時々天帝の声を聞くことができた。妖精たちは、自分たちを神の使いだと思い、うぬぼれていた。妖精たちの中でも姫娥は誰よりもはっきりと天帝の声を聞くことができた。そのため、彼女は特別視されたし、ねたまれた。

「母上、天帝とは一体何なんでしょう？」

ある日、深刻そうな顔をし、レオニードは聞いた。

「あなたは天帝の声を聞いたことはありませんか？」

「ありませんけど。」

「彼は、プラネシアン、神です。」

姫娥は微笑んだ。

「では神はどこにいるんですか？まさかこの空の上じゃないですよね？」

「違うわ。」

「ではどこですか？」

「この宇宙の外にいます。」

「この宇宙の外と言うと？」

「私たちの宇宙は、プラネシアンが創造した世界の中にあります。そして私たち一人一人はプラネシアンと繋がっているのです。」

「つまりプラネシアンはどこにいるのですか？」

「私たちはプラネシアンの脳の中にいます。そして彼の一つ一つの神経が私たちに繋がっているのです。」

「それは一体、どういうことなんですか？我々は今自分の意思を持って生きているのではないのですか？」

「生きています。同時にプラネシアンも生きています。レオニード、分からないかしら？あなたの頭の中にも一つの、無限に広がる宇宙が存在するのよ？」

姫娥はレオニードを見つめた。彼はこれ以上この話を続けようとはしなかったが、彼はこの話をこう理解した。

天帝とは自然のことであり、妖精も自然の力によって能力を得ることができると。姫娥は自然によって惜しみなく才能を与えられている、もっとも優れた妖精である。地上や空や宇宙が自然の一部であるように、我々もまた自然の中の一部である。天帝の脳の中で生きることが、自然の中で生きていることに等しい。そう彼は理解した。

姫娥はある日、人間を守護していればお腹の子供が大きくならないと思い、精神を分裂させ、人間の世界へ精神を飛ばした。彼女の精神は、妊婦の腹の中の子供の中に入ったが、子供が生まれた際、人魚として生まれてしまったので、魔術に興味のあった子供の母親は、子供に取り付いた物の怪、つまり姫娥の分裂した精神を宝石の中に封印してしまった。姫娥の精神が入った宝石は、子供の額に取り付けられた。子供の名前は『リン』と言った。

さて、精神が分裂している時間には限界があり、精神が分裂できているのはせいぜい1000年である。もし1000年以上精神を分裂していると、全精神が肉体から抜け出してしまい、精神を失った肉体は、石になってしまう。人間が1000年以上生きると妖精になれるという説があるが、人間が1000年以上生きると、それを守護していた妖精の精神が完全に持っていかれ、精神が人間を妖精に変えてしまうのだ。姫娥はその時、大きなお腹を抱えており、彼女の分裂した精神を回収に行くことはできなかった。彼女はそこで泣き崩れた。

「母上：私が行ってあげますよ。」

レオニードは言った。

「そうだわ、小妖精に六連を探させて彼に頼むわ。」

「何故六連なんですか？」

「彼ならやってくれそうな気がするの。私の小妖精も彼のことを知っているし。すぐ見つかると思うわ。」

こうして姫娥は小妖精を数百匹飛ばし、六連を探させた。

六連はリンを見つけ出し、彼女から宝石を奪おうとしたが、失敗した。彼は彼女の額の宝石が取れないことを知り、無理矢理宝石を壊そうとした。ちょうど小惑星が地上に降ってくることを知った彼は、プラネシアンが降臨すると偽り、プラネシアン教の聖人、パチエーリヤと共に人々を一箇所に集めた。そこには姫娥が封印されている宝石を身に着けたリンと、彼女の娘であるカロンもいた。

小惑星はちょうどカロンの頭上に降りてきた。リンは彼女をかばい、その時彼女の宝石が割れ、姫娥の精神が開放され、そのままカロンに宿った。姫娥の精神は彼女を守ったので、カロンは無傷だった。六連がパチエーリヤを守ったので彼女も無事だったが、パチエーリヤは、その時両目を失った。小惑星のせいでこの星は灰色になり、急激に気温が下がり、平均気温が20度から10度になってしまった。しかし、ドームで覆われていたフェアリーランドだけは無事だった。

肉体を失ってもなお旧人類の魂はその場で生き続けた。六連はパチエーリヤに粘土と旧人類の飛び散った肉を混ぜて土人形を作るように命令した。六連は土人形に旧人類の魂と、小妖精を入れ、彼らを動かす、この星を緑にするため、100年もの間種を植えさせた。カロンは、小惑星が頭上に降ってきてても無傷だったことから、プラネシアンが宿った聖女と呼ばれ、崇拜されるようになった。六連は姫娥の精神が宿ったカロンを彼女の家まで連れて行き、

一緒に住んだ。

姫娥の腹はいよいよ大きくなっていった。彼女は六連が犯したことを嘆いていたが、彼女も紙を人形に切り小妖精を入れ、未来人そっくりの外見にし、地上に送り出した。その時、相当の力を使った彼女は、少しお腹の子供が小さくなったような気がした。彼女はしばらくの間カプセルの中で寝る事にした。寝ている間は子供が大きくならなうと思っただのだ。

レオニードはカプセルの中で寝ている彼女を見た。彼女は時々苦しそうにしていた。レオニードには、こうして苦しんでいる姫娥を見ているのが耐えられなかった。それでも数十年間彼女はカプセルの中に寝ていたのだが、日増しに彼女の苦しみ方がひどくなっていくのを見て、ついにレオニードは彼女を起こしてしまった。彼女は起きるなり、レオニードにしがみついたまま苦しみ出し、難産の末、子供を出産した。女の子だった。彼女はそれでも子供を育てようとはせずに、捨ててしまった。

「赤ん坊はどうしたのですか？」

「捨てたわ。」

「何でそんなことを？」

「理由は何度も説明したじゃない。もういいのよ。それに彼女は六連が捨ててくれると思うわ。」

「何で六連が捨てる事になるのですか？」

「子供が捨てられている夢をカロンに見させたのよ。彼女ははっきりとその夢を覚えているものだから、不思議に思っ六連にその話をすると思うの。で、彼は私の子供を捜しに行くのよ。子供はすぐに見つかるわ。だって初めて私が彼と会った所に捨てたんですもの。」

「.....」

レオニードは黙って彼女の話聞いていたが、だんだん彼女のしていることが許せなくなつてきて、彼女を見る度にイライラするようになってきた。子供を捨てたことも腹立たしいし、彼女が言う子供を捨てる理由も納得いかなかった。何よりも、彼女がとうの昔に別れた息子を未だに思っているのが許せなかった。彼はまだ顔も見なかったことのない六連に嫉妬した。

姫娥は出産後、体が軽くなった気がし、久しぶりに庭を散歩した。だが、庭の果樹園で彼女は見てしまった。あの紫色の桃を。彼女は真っ青になった。

「レオニード！ちよつと来てくれないかしら？」

「何ですか？母上。」

「この木はどうしたの？」

「ああ、この木はですね、知り合いの妖精に苗をもらったんですよ。そしてここに植えたらこのように実が成る程に成長したのです。そろそろ食べ頃ですね。」

「絶対に食べちゃだめよ！お願いだから食べないって約束して！」

姫娥はすっかり取り乱してした。

「...どうしてですか？」

レオニードは僅かに笑った。姫娥は彼の顔を見てギョツとした。

「とにかく、この実を食べると恐ろしいことが起こるのよ。」

「通常の何倍もの大きさに勃起して理性をなくして、誰これかまわずSEXしたがるんですよ?」

「知っていたの?」

「はい。妖精の精液はこの果実の汁の味がするらしいですね。効果はこの十分の一にも満たないようですけど。まあ未だに童貞の私にはこの果実がどんな味がするかなど、想像もできませんけどね。」

レオニードは言った。

「と、とにかく決してこの実を食べないって約束してくれないかしら?」

姫娥は必死でお願いした。

彼女はいつかレオニードがわざとこの実を食べてしまうのではないかと心配した。しかし、実が全部落ちて腐っても彼はいつものままだったので、姫娥は安心した。こうして一年が過ぎ、再び紫色の桃が生る季節がやって来た。

ある夜姫娥が眠っていると、顔に何か生暖かい汁のようなものが垂れてきたので目を開けると、目の前でレオニードが裸になってペニスをしごいていた。

「きゃあああああ——っ!」

姫娥は飛び起きようとしたが、レオニードは彼女の上に馬乗りになり、彼女の服を引きちぎった。彼女の裸を見ると、彼のペニスは一段と大きくなった。レオニードは姫娥の乳首をつまんだ。すると乳が出てきたのだった。レオニードは乳を吸い始め、そして歯を立てて噛んだ。

「痛いっ!」

姫娥は目をつぶった。彼女は嫌そうだったが、レオニードは止めようとはしなかった。彼はいつもの誠実な彼ではなかった。彼は姫娥の膣に指を入れ、上下にかき回した。彼の指は長くて、その指を3本も入れられて痛かったが、じんと足の先まで感じた。

「レオニード、やめて。お願いだから!」

姫娥は自分のの上に乗っているレオニードの肩を持ち上げようとしながら、泣き叫んだ。

「却下!」

レオニードは攻め続けた。彼女の口にペニスを差し込み、舌を動かすように命令した。

姫娥は言われるままに舌を動かし、玉をもらった。

「ああっ、いい。いいよ、姫娥。…姫娥愛しているよ。」

彼はそう言いながらも目から涙を流していた。彼は彼女の口から外に出し、射精した。

「今日からあなたのバター犬にしてくださいよ。」

彼は姫娥のあそこをくちゅくちゅ音をたててなめまわし、舌を中に入れた。彼女の汁を吸うと、思わずよだれが出た。次に彼はぬれぬれの姫娥の中に入れ、ピストン運動をした。ど

しんどしんど、ベッドが軋んだ。

「ああっレオニード！あなたあの実を食べてしまったのね！私があれば食べないでっってお願ひしたのに！」

「食べたといつてもたつた一口ですよ？」

「でもこんなに大きくして！極太注射はだめなのよ…壊れちゃうわ。」

姫娥は汗まみれになり、息を切らせながら言った。レオニードには彼女が喜んでるようにしか見えなかった。

姫娥は官能的で、彼女を見た男は誰でも一度は彼女と寝てみたいと思っていた。それは息子であるレオニードにとつても同じだった。彼は姫娥以外の女は目に入っていなかった。

レオニードは気が済むまでやり続けた。彼は彼女に対する日ごろの鬱憤を晴らし、満足していた。しかし終わると、罪悪感を覚えすにはいられなかった。

「どうして…どうしてこんなことをしたの？」

姫娥はグツタリとベッドに横になって言った。

「姫娥は平気ですよ。何の罪悪感もないはずだ。近親相姦ならもうやってしまったし、子供だって産んでいますし、平気ですよ。」

「平気なもんですか。私はあなたとはこんな関係にならないと、決めていたのに。」

「でも六連とは平気でSEXした。」

「それは…」

「何故彼ならよかったのですか？彼と私の違いって何ですか？」

「六連は恋人だったのよ。でもあなたは息子だった。」

「何言っているんですか？六連はあなたの息子ですよ？」

「ええ、そうよ。でも私はレオニードとはこんな関係にはなりたくなかった。一線を越えてしまわぬように努力してきたのよ。あなたの前ではSEXもオナニーもしなかった。」

「それは私も同じです。人魚は性欲が強いはずなのに生まれてから一度もSEXしないであなただけを見ていました。」

「あなたの気持ちには気づいていたわ。だってこんなに尽くしてくれたんですもの。でも私はあなたの気持ちに答えることはできないわ。きっとその方がいいと思うの。これはあなたのためなのよ。私を母親以上に思わないで。」

「それがあなたの考えですか？でも私はたとえこの愛が憎しみに変わったとしても、あなたを想うのをやめません。」

「悪いけどそれはダメよ。」

今までこんなにも私を愛してくれた人なんていなかった。だから自分でもどうしたらいいか分からない。あなたはいつも私の傍にいたわ。でもそれが私には負担でもあったのよ。あなたは私の自由を奪っているとは思わないの？あなたがいると私はすることがないわ。いいえ。何もできないのよ！

あなたに愛されて私は幸せよ？でもあなたの愛は重すぎるの。私はあなたの愛が怖いよ。」

二人はそれ以来しばらく口を聞かなかったし、玉宮の中でも会わなかった。レオニードには話し相手がいたが、姫娥にはいなかった。彼女はあれ以来誰ともSEXしていなかった。その頃から彼女の服は露出度の低いものになっていった。

第七節 ひたすら愛染

今まで守護してきたカロンが覚醒した。姫娥はいよいよ彼女と別れる日がくるのだなと思った。

「カロンが覚醒したのですか？」

「ええ。」

レオニードが久しぶりに話しかけてくれた。彼はもうあの夜のことを根に持っていないようだ。姫娥は嬉しくて彼と色々な話をした。彼女はカロンやデスコル、六連の話をし、レオニードは今現在の自分の仕事の話をしていった。彼はまぼろし山の最高責任者で、事実上、フェアリーランドの王様だった。最初の頃はお互いにどう接したらいいか分からなかった二人だったが、次第に打ち解け始め、前以上に仲良くなることができた。

カロンは無事子供を出産した。しかし、3日後に亡くなった。守護妖精は、守護していた人間が亡くなると、人間が持っていた全知識と記憶を自分のものとして手に入れることができた。こうして妖精は守護していた人間が亡くなる度に能力が上がっていくのである。

「彼女、早かったですね。」

「ええ、そうね。」

「子供の名前は何ですか？」

「未来人よ。」

「男の子ですか？」

「ええ。」

「私が彼の守護妖精になってもいいですか？」

レオニードがそう尋ねると、姫娥は、にっこり笑って頷いた。こうして未来人の肉体にはレオニードの分裂した精神が入られる事になったし、彼の額にはレオニードのしるしがついた。レオニードはこれから鏡を見ながら未来人の様子を伺うことになるのだが、鏡がなくても、時々未来人が考えていることが無意識に聞こえてきた。

「母上。肩が凝っていませんか？」

ある日姫娥が庭でお茶を飲んでみると、レオニードが背後からやって来て、彼女の肩に触れた。

「まあ、レオニード、突然どうしたの？」

姫娥はびっくりして後ろを振り返った。

「もし凝っていたらマッサージしてさし上げようと思ひまして。」

「凝っているわ。しかも物心ついた頃から。…でもどうしてそれが分かったの？」

姫娥がそう言うのと、レオニードが突然笑い出した。

「何がおかしいのよ。」

「いいえ、別におかしいことなどありません。気にしないで下さい。」

「素晴らしいながらもレオニードは笑い続けた。」

「気にするわよ。ねえ、肩が凝っているってそんなにおかしいことなの？」

「いいえ、おかしくありませんよ。」

「じゃあ何がおかしいの？答えて！言わなきゃ分からないわ。私にはあなたの心が読めないのよ？」

妖精は人間の心が読めるが、妖精の心は読めなかった。旧人類も人の心が読めたが、妖精の心は読めなかった。妖精の心は見えない壁に覆われているのかもしれない。

「どうか気にしないで下さい。」

「気にするわよ！」

姫娥が椅子から立ち上がりそう怒鳴ると、レオニードは笑うのをやめた。

「すみません母上。あなたを見てみると、おかしくて…」

「失礼よ！」

「すみません。」

「で、何で笑ったのかしら？」

「あなたの肩こりの原因ですよ。」

「原因？」

「はいあなたの肩こりの原因はこれです。」

「そう言っつてレオニードは姫娥の胸を触った。」

「きゃ！」

姫娥はレオニードの手を払い、自分の胸を両手で覆った。

「これが目的でマッサージしようとしたの？」

「いいえ。特にそんな事は考えていません。」

「そうかしら？」

「そうですよ。」

姫娥は言った。

「せっかくだからマッサージしてもらおうかしら。マッサージ代は今の痴漢行為ってことでいい？」

姫娥は再び椅子に座り、長い髪をかき分け、全部前の方に持っていった。彼女の白いうなじが見えた。

レオニードは肩を揉み始めた。さっきの痴漢行為は初めにやるのではなく、肩を揉んでい

る最中にやるつもりでいた。痴漢目的ではないといったものの、下心があつてやったことは明らかだった。

「いたーい、もう少しゆっくりお願いできる？首の付け根が痛いよ。」

姫娥の肩はかなり凝っていた。レオニードはこれから時々彼女の肩をもんであげようと思つた。

「ありがとうレオニード、大分軽くなったわ。」

「よかったら定期的にやりましょうか？」

「まあ本当？悪いわね。」

こうして彼女は肩だけでなく、足や腰もマッサージされるようになった。

いつものようにレオニードに肩を揉んでもらっていた時、レオニードが彼女のうなじに吸い付くようにキスをしてきて、キスしている最中に胸をもまれた。彼女は抵抗しなかった。

「姫娥、こんな所にいたのか、随分探したよ。」

その時姫娥の前方から声が聞こえた。

「六連！」

姫娥はレオニードを軽く突き放し、立ち上がった。

レオニードは不愉快そうに六連の顔を見た。

「彼は誰？」

「紹介するわ、私の息子のレオニードよ。」

「…レオニードです。」

「六連だ。」

そう言うと六連は背を向けて玉宮の方に行ってしまった。

「待って。」

姫娥は彼を追って宮殿の中に入っていった。

六連はレオニードの部屋に入ると、服を脱ぎ始めた。

「姫娥も脱ぎなよ。その服、暑そうだけど。」

六連は笑った。姫娥は戸惑いながらも彼とSEXした。

姫娥はSEXの間中、上の空で、あんなに会いたいと思っていた六連にせっかく会えたのに、うれしくなかった。六連は確かにレオニードに胸を触れられていた自分を見ていた。彼は何も言っていないが、心の中では何を考えているのだろうか？

SEXが終わると、すぐに六連はベッドから出た。

「六連？どこに行こうとしているの？」

「別に。」

「どこにも行く必要がないならゆっくりしていつて。」

「嫌だね。」

六連は姫娥を振り払うように言った。

「どうして？」

「あの男は誰だ！」

「息子だって言ったじゃない。8000年以上も生きていると何人も子供ができるものなの。」

「だろうね。」

「だから彼のことは気にしないで。」

「でも君はあの男とSEXしてしまった。」

「え？」

「凶星だろ？子供を僕に預けて自分は息子とSEX？」

六連は笑った。

「あなただって私の息子なのよ。」

「知っているよ。」

「何時から？」

「大分前からさ。何で妊娠したからって僕の前から逃げたんだよ。」

「これ以上落ちたくなかったのよ。」

「あっそう。でもあの男とSEXして、再び落ちた。」

「落ちてなんかいないわ。彼は誠実でいい子なの。SEXだって一度しかしていないし。」

「一度でもやったんだろ？…どうしようもないね。君も、カロンも。二人の男の間を行ったり来たりしてさ。デスコルに冷たくされたら、僕のところに来て、そして僕が相手にしなかったら、デスコルのところに行ったり行かなかったりを繰り返していたカロンと同じだよ、君は。もつとも、彼女と違って君はぶよぶよに太っているけどね。」

六連はそう言うのと部屋を出て行った。

姫娥は急いで上着を羽織り、彼を追った。

「待って、どこへ行くの？」

「ミルナのところだよ。」

「ミルナ？」

「デスコルの妻だった女だよ。これから彼女との決着を僕がつけようと思ってね。」

「デスコルはどうするの？」

「あいつはディオオーネと未来人のお世話だよ。」

「彼女とデスコルを会わせないの？」

「会わせるわけないだよ。」

「どうして？カロンを覚醒させたら、ミルナと会わせるってデスコルに約束したんですよ？」

「アレは嘘だ。」

「嘘だったの？」

「うん。僕が嘘つきだって事は姫娥も知っているだろ？」

「知らないわ。」

「あっそう。じゃあ君がいた時は正直者だったんだ。」

「ねえ、デスコルと彼女を会わせてもらえないかしら？」

「嫌だね。」

「どうして？」

「君との再会が僕にとって無意味だったからさ。君が僕の気を悪くさせた。」

「そんな…ひどいわ。」

「ひどい？自分がしてきたことを棚に上げてよく言うよ。とにかく、僕は君に失望したよ、さようなら。」

「さっき私がしていたことなら謝るわ！いつもああいうことをしているわけじゃないのよ。あなたと別れてもずっとあなたのことを考えて生きてきたわ。ねえ、帰ってきて、私の元に！」

「……」

六連はどこかに行ってしまった。

しかし彼とはそのまま終わりにならなかった。彼はその後もデスコル、ディオオーネ、未来人と住んでいたが、ある日デスコルがいなくなったのをきっかけに子供たちと言い争うようになり、出ていかざるおえなくなってしまった。彼は姫娥の所に舞い戻ってきた。レオニードは彼とは一言も口を聞かなかった。数年後、ディオオーネがここを訪ねてきて、4人で住むことになった。未来人は一人でカロンの家に住む事になったので、姫娥は彼を連れてデスコルの弟の家に養子に出した。姫娥が再びまぼろし山に戻ってくると、六連は娘のディオオーネと寝ていた。姫娥がレオニードに訳を聞くと、ディオオーネを人間として育てようとした六連は彼女の性器に寄生植物を植え付け、彼女が人魚に変身できないようにしていた。しかし、人魚になることを望んだディオオーネは、六連に処女膜を破ってもらい、寄生植物を体内から引きちぎってもらっていた。彼女は出血がひどく、病院に運ばれてしばらく寝たきりだったが、元気になった途端、SEXをしたがるようになり、その場にいた六連とすることになった。近親相姦で生まれた娘も、近親相姦に陥ってしまったのだった。姫娥は彼らのSEXを止めようとしたが、六連の怒りを買ってしまった、怒った六連はディオオーネを連れて再びカロンの家に戻ってしまった。姫娥はその場で泣き崩れた。レオニードも地面にしゃがみ、泣いている彼女を抱いて背中を擦った。

「そんなに悲しまないでください。ここで待っていていればまた彼に会えますよ。」

「そうかもしれないけど…あの子が私から離れてしまったのが辛い。」

「私でよければ彼の代わりになりますよ。」

「そんな…代わりだなんて。」

「私では彼の代わりにはなれませんか？」

「だってあなたはあなたよ。六連とは違うわ。」

「では私はどうしたらいいのでしょうか？」

レオニードは姫娥の顎を上げ、彼女の顔を自分の顔に向けさせた。姫娥はレオニードと目が合うと、頬を赤らめて再び目をそらせた。

「…分からないわ。でもいつまでもこんな私の傍に居るのは具合が悪いでしょう？」

「私はあなたの為だけに存在します。私にとつてはあなたこそがプラネシアンなんです。私はあなたを中心に回っている惑星にすぎません。」

「まあ、危険な事を考えるのね。私がいなくなったらどうするの？」

「あなたこそ危険な事を考えているじゃないですか、あなたがいなくなったら私の存在理由がなくなってしまう。私はあなたのそばにいたいだけですよ。」

「そう、分かったわ、ありがとう。…そろそろ離れてくれないかしら。あまり強く抱きしめないで欲しいのよ。」

「…それに…さっきから当たっているわ。」

姫娥は僅かに頬を赤らめた。

「すみません…でも何もせずにあなたの傍に居るだけというのは、辛いですよ。」

レオニードはそう言うど苦笑いした。

姫娥はそのままレオニードに抱きしめられていた。

「ミクヒト…」

「未来人？」

「彼に影響ないかしら？」

「何がですか？」

「あなたがこんなんで彼は大丈夫なのかしら、将来が心配だわ。」

「こんな時にそんな話ですか？…正直何時変身してもおかしくないですね。」

「彼は人間よ？」

「いえ、私です。」

姫娥は思わずレオニードを突き放した。そして彼から逃げようとした瞬間、レオニードに押し倒されてしまい、玉宮の前の七色に輝くタイルの上で全裸にされた。

「私は…あなたと一つになりたい。あなたの中に入ることで、私の黒い肌とあなたの白い肌が混ざるのを感じてみたいのです。」

「あなたは私の息子なのよ？リゲルから預かった大切な息子なのよ。何の権利があつてこんなことをするの？」

「確かに私はあなたの息子として育てられました。そしてこの星に着いてからは、あなたをお守りするように父上に言われました。でも私はもうあなたを必要以上に愛してしまったのです。姫娥。私がこれほどあなたに尽くしているのに、あなたはまだあの男を見るのですか？」

「ごめんなさい。」

「そればかりですね。いいですか、私は忠実な犬ではないのですよ？」

「あなたを犬と思ったことはないわ！むしろ馬よ。あなたは馬だわ。」

「馬並みだって言いたいのですか？」

「そうよ、馬じゃなかったらこんなに激しくしないわ。どうしてこう底なしなのよ！あなたの愛は受け止めきれないのが分からないの？」

太陽が彼のたくましい上半身の背後から刺していて、姫娥は目を細めてそれを見た。そして今いる所よりも、さらに高い場所へと突き上げられた。レオニードとは息が合っていたし、彼には満足だった。しかし、終わった途端に罪悪感に襲われた。

「…本当に、ダメな母親だわ、私。」

姫娥の目から涙が溢れてきた。

「すみません。私のせいで。」

「いいのよ…」

こうして姫娥とレオニードは日常的にSEXするようになった。姫娥は息子として育ててきたレオニードとこのような関係に陥ってしまったことを深く後悔していて、心では後悔しつつも、体の方は必要以上に感じてしまい、許されない愛だと思えば思うほど、彼とのSEXをやめることが出来ずにのめり込んでいった。レオニードはそんな彼女を慰めるために愛撫を続けた。そしていつか彼女が自分だけを見られる日を待ち、その日が近いことを確信していた。